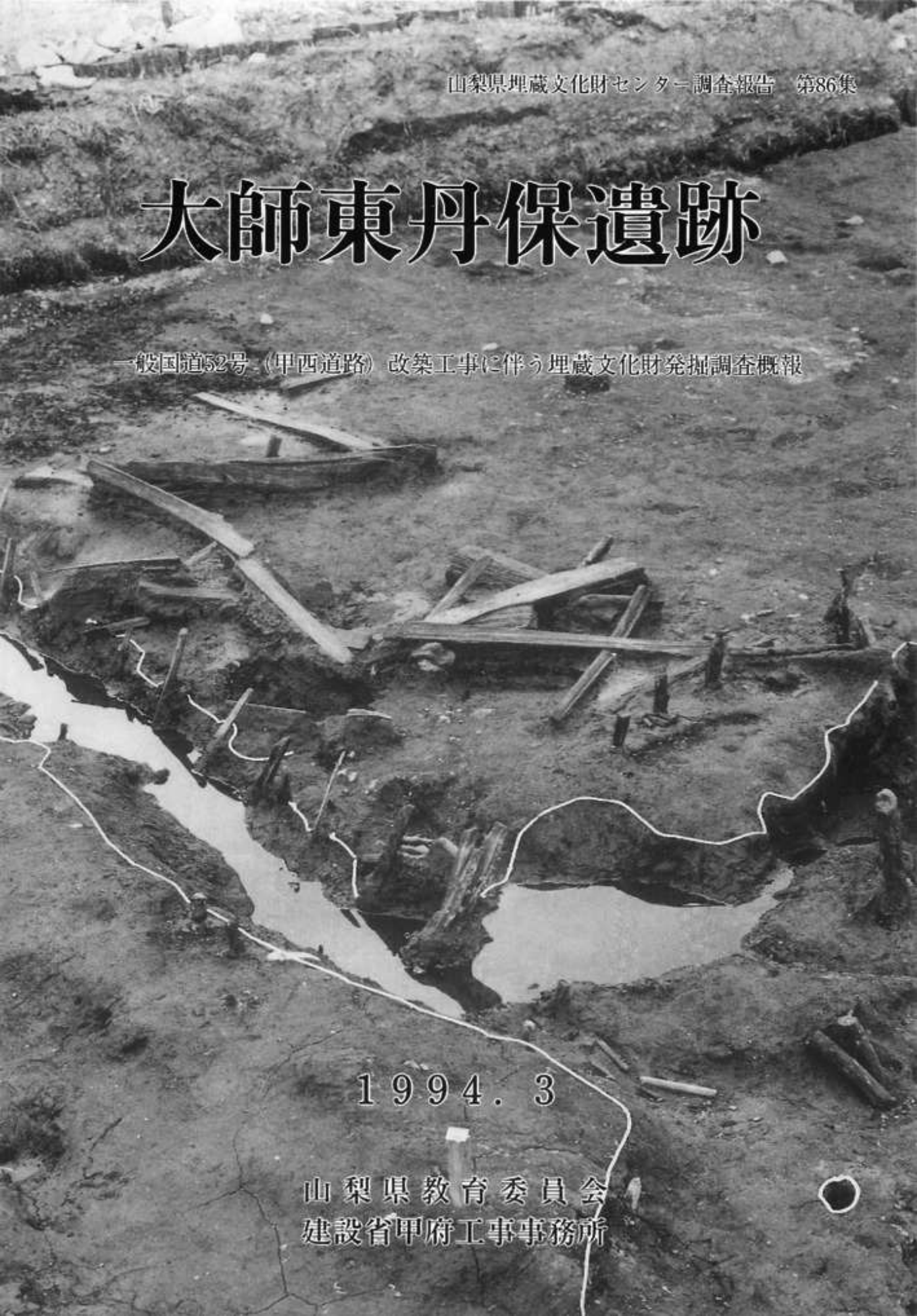
山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第86集

大師東丹保遺跡

一般国道52号（甲西道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報



1994. 3

山梨県教育委員会
建設省甲府工事事務所

序

本書は建設省のおこなう一般国道52号改築工事にともなう発掘調査の概報であります。この工事区域には10箇所の遺跡がありますが、大師東丹保遺跡は、この内の南端に近い甲西町に所在しており、甲府盆地でも最も低い地帯に位置する遺跡であります。扇状地末端の豊富な湧水のもと弥生時代以降の遺跡が多く残されており、中でも古代末期から戦国時代までの甲斐源氏や甲斐武田氏と関わりを持った伝承および神社仏閣などの残されている地域でもあります。特にこの地域に勢力を張った大井氏にかかわる遺跡の所在も推測されるところであります。このような歴史的環境に囲まれた本遺跡の調査が今年度から始まった訳でありますが、今回はⅠ区～Ⅳ区まで長さ400mにも及ぶ大きな遺跡の内、Ⅰ区とⅡ区とを発掘いたしました。調査の結果弥生時代と中世の遺跡が確認されましたが、特に第一面は鎌倉時代中頃を中心とした生活面でありまして、Ⅱ区では建物跡や水辺の祭祀跡、Ⅰ区ではその時期の水田跡や水路跡などが調査されました。出土遺物も漆塗りの椀・下駄・草履・曲物などの木製の日常生活品、呪符・人形・斎串などの祭祀具、銭・刀子・鎌などの金属製品など多岐に亘っております。建物や水田の跡と合わせて、生々しい中世世界が掘り起こされ、今後の研究に新しい資料を提供いたしました。この層の下からは弥生時代の文化層が3面確認され、水田跡、水路、そこに堆積した建築用材を始めとした木製品や土器類が発掘されました。特に後期の終り頃の層から検出された地震に伴う噴砂、中期終末の面に堆積した火山灰など、当時の環境を探る上での貴重な資料も確認されております。この遺跡の調査はまだ継続いたしますが、ここに概要をしるし、皆様方の研究の一助となるよう願う次第であります。

末筆ながら調査にあたってご指導・ご協力を賜った関係機関各位、並びに調査に従事された方々に厚く御礼申し上げます。

1994年3月

山梨県埋蔵文化財センター
所長　大塚初重

目次

1．調査の経過
2．遺跡をとりまく環境
3．Ⅰ区の発見された遺構と遺物
4．Ⅱ区の発見された遺構と遺物
5．まとめ

例言

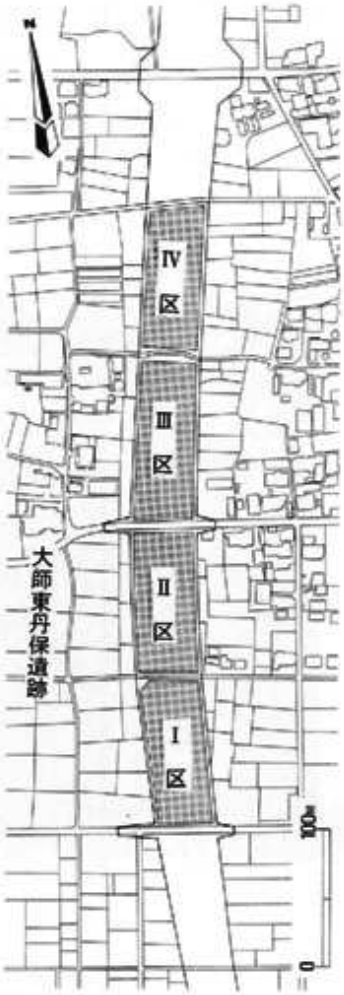
1．本書は、1993(平成5)年度に実施した山梨県中巨摩郡甲西町大師字東丹保に所在する大師東丹保遺跡の発掘調査概報である。遺跡はⅠ区～Ⅳ区に分かれるが、このうちⅠ区とⅡ区を対象としたものである。
2．調査は一般国道52号（甲西道路）改築工事に伴う事前調査であり、山梨県教育委員会が建設省より委託を受け、山梨県埋蔵文化財センターが実施した。
3．本書の執筆・編集は新津　健・田口明子（Ⅰ区）、小林健二・小泉　敬（Ⅱ区）が行った。
4．鎌倉時代の土器、陶磁器については、鶴見大学助教授、河野眞知郎氏にご教示いただいた。
5．本報告書にかかる出土品・図面・写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

1．調査の経過

国道52号の通称甲西バイパスの建設に伴い山梨県教育委員会と建設省甲府工事事務所とで協議のもと、平成元年度から工事区域内における遺跡の所在確認調査が始められた。その結果10箇所の遺跡が確認されたが、大師東丹保遺跡も平成３年度の試掘調査により発見された遺跡である。遺跡が広いことから既設の道路による区画をもとに、南からⅠ区～Ⅳ区まで区分し調査単位とした。各調査区は概ね長さ100ｍ、幅40ｍであり、今年度はⅠ区とⅡ区の調査を行った。試掘調査では、中世前半期の水辺の祭祀とみられる斎串群や水路、それに水田跡等が確認された。また付近には弥生時代の集落址もあることから、これにかかる水田跡の存在も予測された。試掘調査中も出水が激しかったことから本調査では調査区域を鋼矢板で囲み、排水施設を設け発掘を行った。調査の結果、Ⅰ区Ⅱ区合わせて４面の文化層が確認できた。鎌倉時代を中心とした層が一面、弥生時代の層が三面である。調査は平成５年４月12日から同年12月27日まで行い、平成６年１月から３月まで整理作業を実施した。

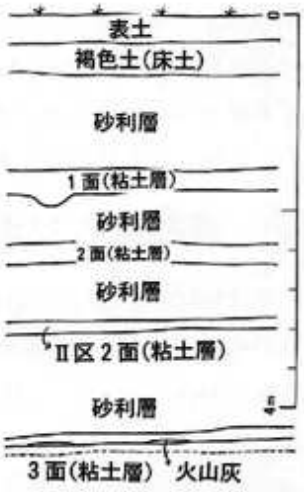
2．遺跡をとりまく環境（地図参照）

本遺跡は標高245ｍを測る、甲府盆地でも低位の地域に位置する（1）。この一帯は扇端部にあたり、湧水の豊富な地域で弥生時代以降の遺跡が多く知られている。このうち発掘調査の行われた遺跡には、住吉遺跡（８・弥生時代）と清水遺跡（７・弥生～中世）とがある。また中世では古長禅寺のような大井氏とかかわりのある寺院があり、さらに中世関係の伝承も多い。今回の調査でも重要な中世遺構が発見されており、古代末の甲斐源氏から戦国大井氏まで含めた歴史的環境に恵まれた地域であることがわかる。西側の山寄りに進めば古墳も多く（10・物見塚、11・塚原古墳群）、また縄文時代の集落（９・鋳物師屋遺跡）も知られている。なお、甲西バイパスにかかる遺跡（１～６）は位置図に示した。



3．Ⅰ区の発見された遺構と遺物

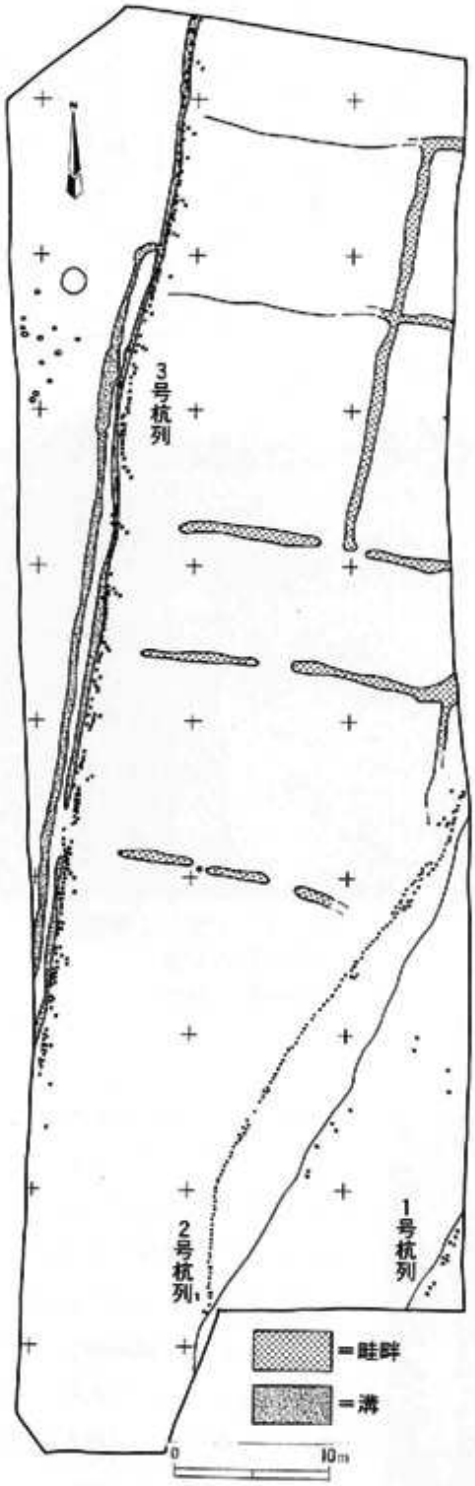
〔層位と時代の関係〕　Ⅰ区では３面の文化層が確認された。土層断面模式図で説明すると、地表下1.5ｍ程で第一面となる。この面は鎌倉時代の層で、水田址・水路・杭列等が発見された。Ⅱ区ではこの時期の建物や祭祀跡等がみられることから、両地区あわせて中世前半期の居住区と生産の場の跡が同時に調査されたことになる。この第一面から70㎝程下げると弥生後期後半の水田址の広がる第二面となる。さらに1.8ｍ程で第三面となり、弥生中期終り頃の層がとらえられる。なお、Ⅱ区でも弥生後期の面が調査されたがこれは、Ⅰ区第二面の70㎝程下部であることから、弥生時代の生活面は薄く不安定ながらもいくつか存在していたことになる。いずれにしても弥生時代から現代までいくたびかの大洪水に見舞われたことが、土層断面から観察できる。



土層断面模式図（1／80）

〔各時代の遺構・遺物〕　第一面の水田は一辺10～15ｍの比較的大きい区画のもので、畦畔もしっかりしている。発掘区中央部は洪水で流されたらしく、僅かに畦畔の残存が認められた程度であるが、最低６枚の水田跡が確認できた。やや高い面にある残存状況のよい水田も洪水の影響を受けたらしく、畦畔が崩れた箇所があったり、流木の多い水田面もみられた。水田内に堆積した土壌の一部を水洗選別したところ、稲稈や雑草を始めとした様々な植物の種子・昆虫類が検出されており、現在鑑定中である。他に水路２条、杭列４列などが調査された。発掘区西側に確認された３

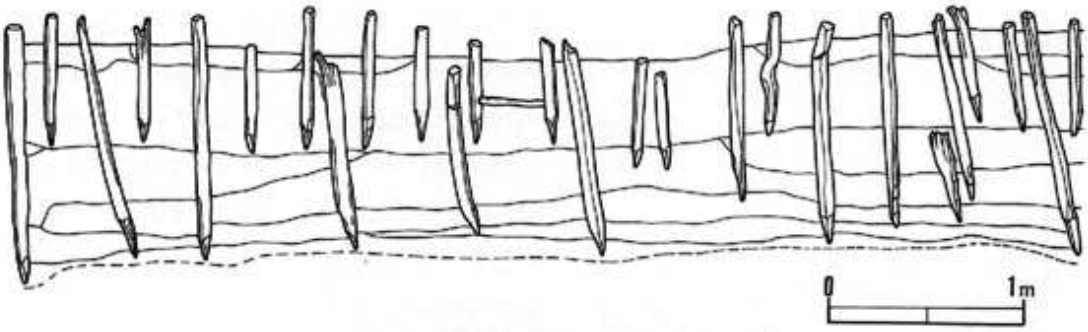
発掘区全景（手前がⅠ区）



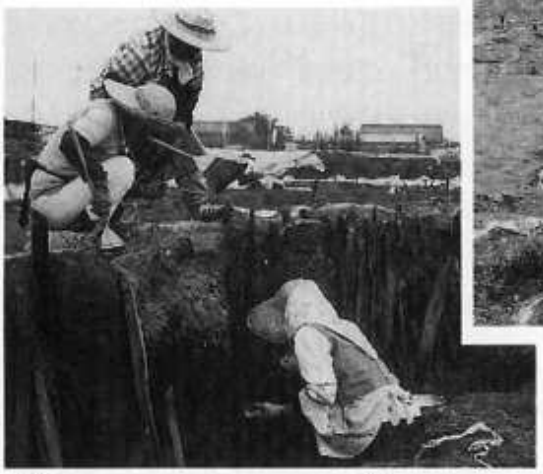
号杭列は、長さ１ｍ以上の長いものと70㎝前後の短いものとを交互に打ち込んだ堅固なもので水流から生産の場を守った護岸補強の杭列とみられるものである。この区域にはいく筋もの水流の跡が残されている。特に調査区南東端には厚い砂利層で埋まった自然流路があり、この両岸部分にも数列の杭が打ち込まれている。水対策に大きな労力が費やされたことがわかる。

第二面からは弥生時代後期後半の水田や水路が発掘された。水田は一辺が５ｍ程の小区画である。この第二面は基盤である粘土層自体があまり厚くなく、さほど安定した面ではないこともあり、調査区の北側３分の１程度しか残っていなかった。この面での重要な成果は地震による噴砂を伴った地割れの跡の検出である。発掘区を南西から北東方向に斜めに横切っており、水田畦畔や水路に亀裂や段差を生じさせている。弥生後期後半の水田面の埋土上10数㎝の層に及んでいることから、弥生終末前後の時期に発生した地震に伴うことが考えられる。

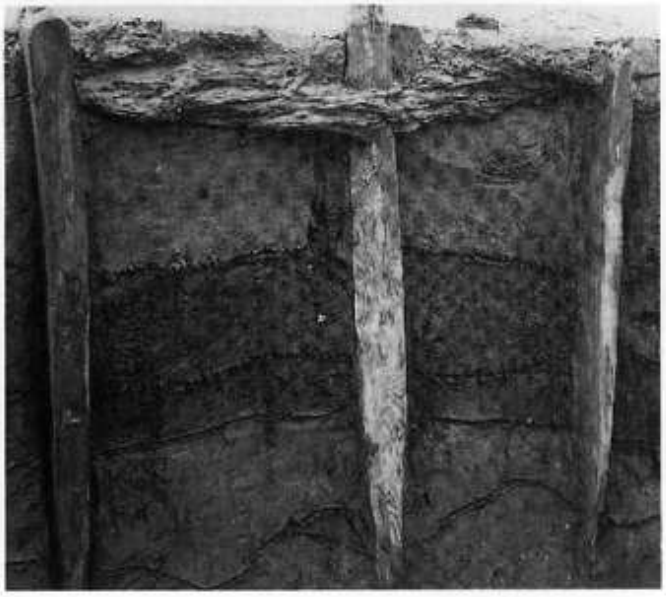
第三面は弥生中期末頃の面で、溝が３条確認できた。この溝中および付近からは建築用材とみられる木材や自然木等が出土した。トチノミ・クルミを始めとした種子類も多く、これも現在鑑定中である。これらの遺物とともに弥生中期末から後期始めとみられる土器が出土している。また牙製の鏃や大型の打製石斧も発見された。この面では火山灰が確認されており、溝底では厚さ３㎝にも及ぶ箇所もある。第三面全体でも斑状に堆積していた。このような状況から、ここには水田等はなく、元来湿地でありその中を川が蛇行して流れていたのかもしれない。但し、まとまった建築用材や復元可能な土器も出土していることから、ごく近くに集落ないし生産の場があったことは確かであろう。



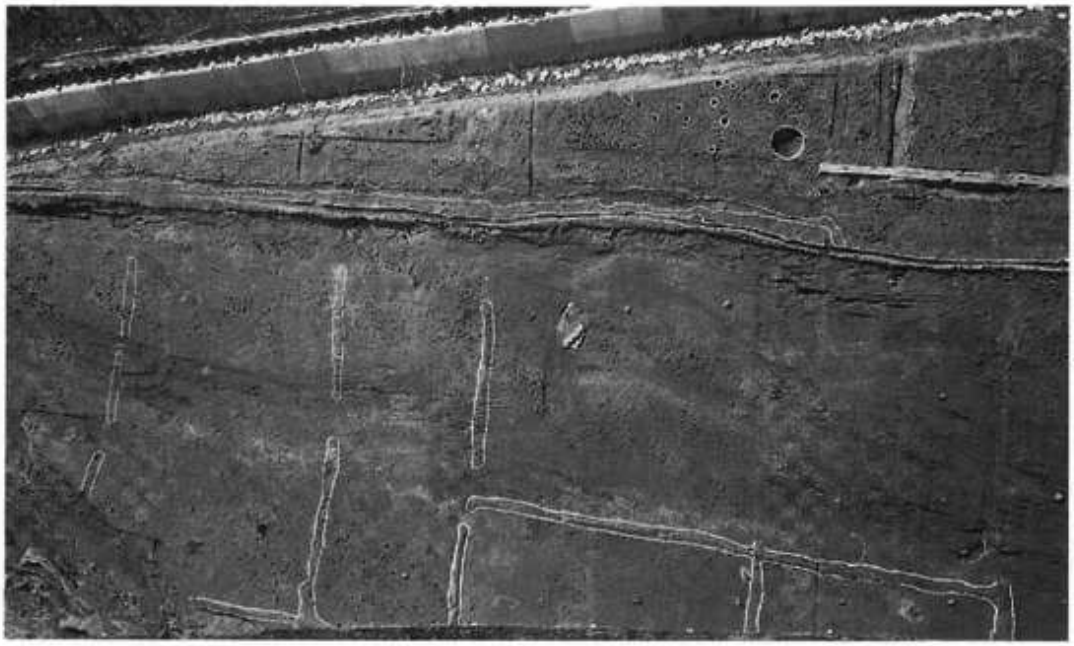
第一面　3号杭列側面図（部分）（1／40）



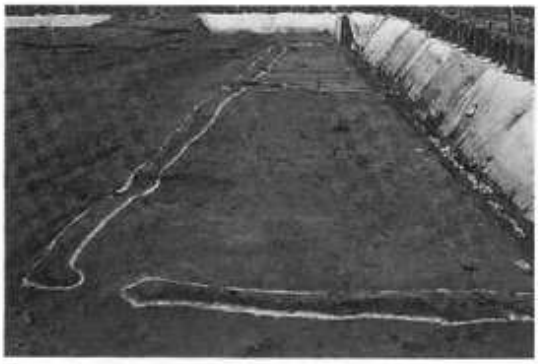
1．第一面　水路と3号杭列
2．3号杭列の断面
3．3号杭列（部分）



〔杭列〕　水流から水田や生活の場を守った護岸には、このような杭列がみられる。図からは長い杭と短い杭が交互に打ち込まれている様子がわかる。さらに細い枝を束ね、杭と杭とを編み結び補強している（写真3）。この部分は土層断面からみると、旧地表に粘土を盛り上げてあることがわかる。中世の土木工事である。このように補強された杭列の内側には水路が2条走っている（写真1）。



1．第一面全景

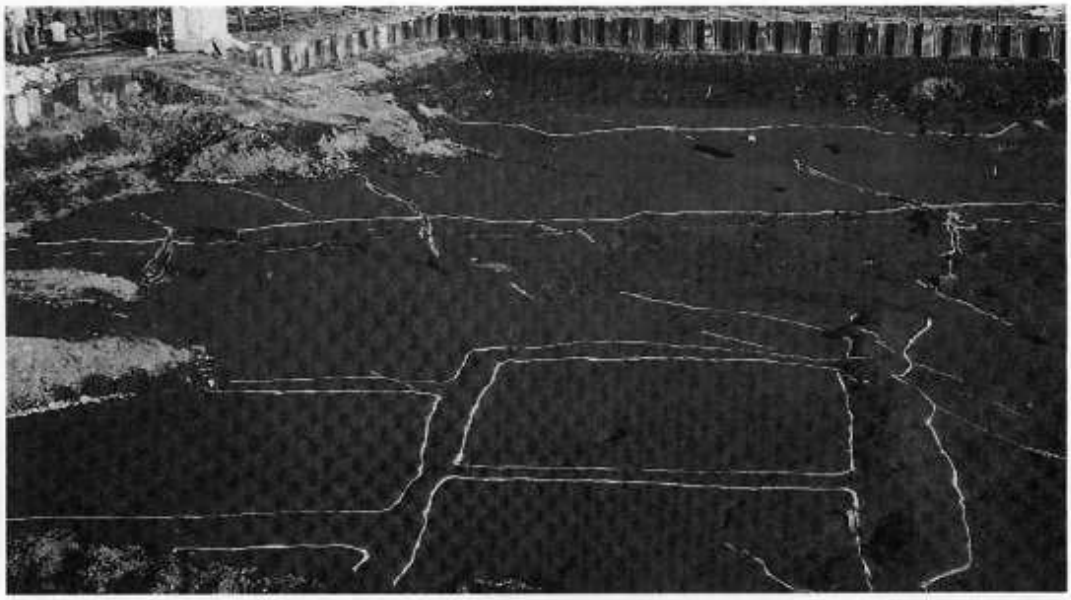


2．畦畔（部分）

3．水田面の流木

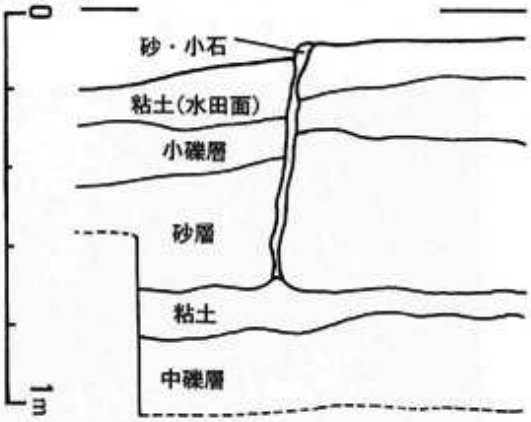
〔水田址〕　第一面の水田は一辺15m程度の区画の大きいものであるが、短辺8～12mの部分もみられる。洪水を受け、残りは良くない。最低6枚が北東から南西方向に並んでいる。杭列や小水路等と同じ方向に延びている（写真1）。これは当時の自然地形に基づくものと思われ、旧河川や氾濫の流路も同じ方向である。この流路を北東に遡れば、歴史上この地域に大きな影響を及ぼしている滝沢川に至るものと思われる。この川は時期により流路が異なっていたとされるが、ちなみに第二面の弥生後期では自然流路が90°近くずれており、北西から南東に流れている。

残りの良くない水田面ではあるが、東側の2枚は残存状況に恵まれている。この南西隅の畔は一部切れているが（写真2）、水口であったのか、洪水で崩れたのかは不明である。ただ、この部分に向かって多くの流木が流れ込んでおり（写真3）、水口に向かって集まってきたことも考えられる。



1．第二面　水田址と地割れ

〔第二面〕　弥生後期後半の面であり、一辺５ｍほどの水田が確認された（写真１）。他に溝２本が調査されたが、この面も氾濫で乱れており残り具合は良くない。ここでは地震による地割れや噴砂がみられた。地割れは水田の畔や溝を切り、段差を作っている（写真２）。この部分の断面をみると、下の層から砂や礫が昇って来ていることが分かる（写真３および図）。

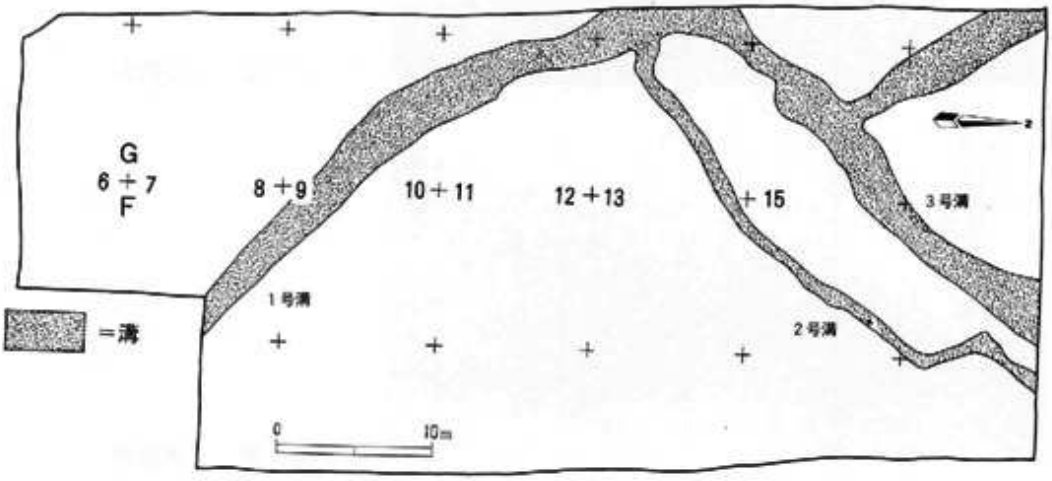


地割れ断面（噴砂）図（1／20）

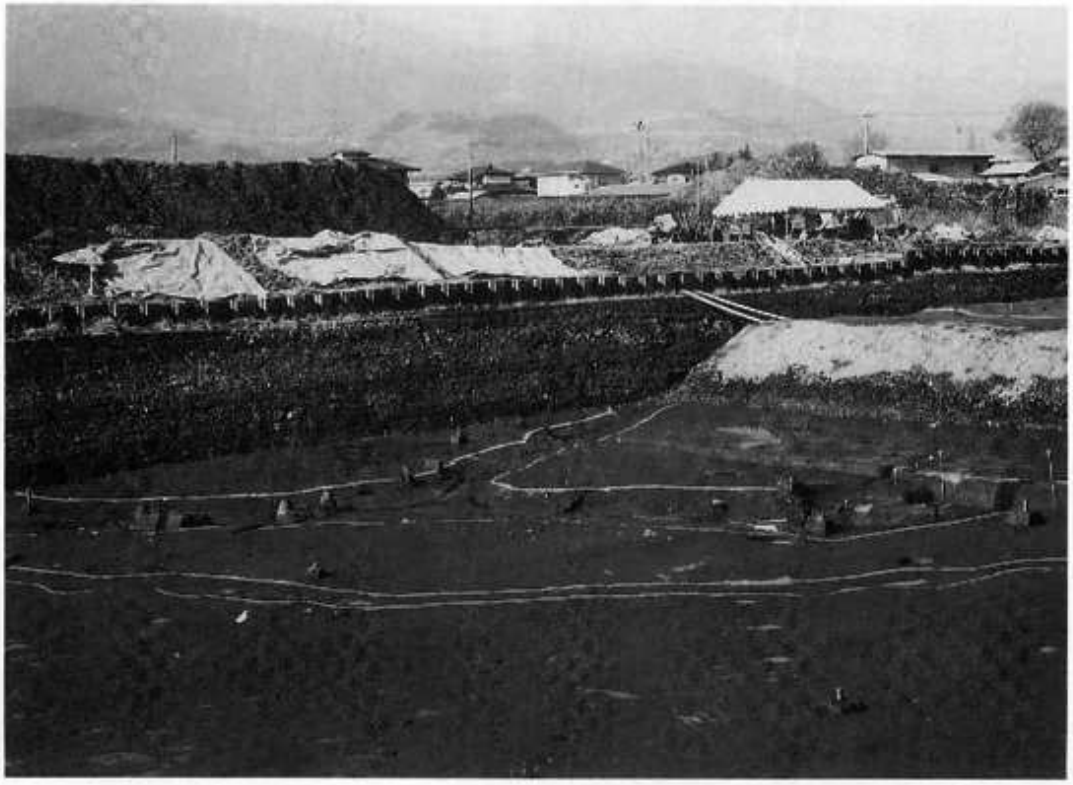
2．畦畔を切る地割れ

3．地割れ断面（噴砂）

〔第三面〕　現在の地表から４ｍ近く掘り下げたところにある。溝３条が調査されたが、これらは一つにつながるものである（図・写真）。調査中も出水が多く、この溝内をゆっくりと流れていた。建築用材とみられる木製品（８Ｐ　写真３・４）や自然の流木があり、同時に出土した土器から弥生中期末から後期はじめにかけての時期であることが分かった。木の実も多く、特にトチノミやクルミが目立つ。また火山灰も堆積していた（８Ｐ　写真６）。

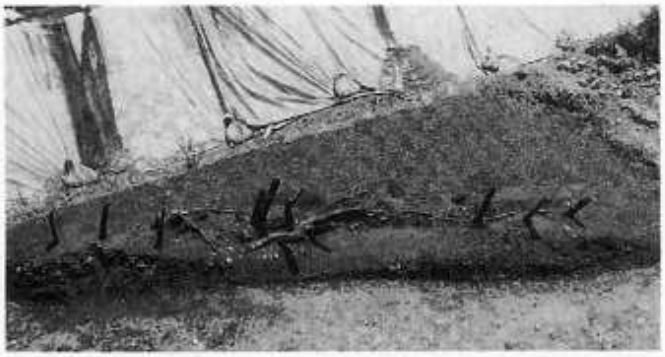


Ⅰ区　第三面　全体図



１．第三面全体（１号～３号溝）、（右側の一段高い面が第二面）

1．第一面　3号杭列



2．第一面　1号杭列

3．第三面　1号溝の発掘

4．第三面　1号溝中の材

5．第三面の弥生土器

6．第三面　2号溝中の火山灰

4．Ⅱ区の発見された遺構と遺物

〔各時代の遺構と遺物〕　Ⅰ区の北側に隣接するⅡ区では２面の文化層の調査を行った。

鎌倉時代の第一面は、平均60cmと非常に安定した堆積をみせる。また調査区北東部分が微高地になっており、南に向かって緩やかに傾斜している。遺構はこの微高地を中心に展開しており、南北に蛇行しながら流れる溝を中心に27条の溝が検出された。一部には杭で補強されていたり矢板が打ち込まれている所がある。これら大小の溝は不整形の区画を造っており、周辺には土壙１基、ピット８基、調査区中央部と南端で性格不明の畝状遺構２ケ所が存在している。さらに微高地部分は包含層にもなっており、掘り下げた結果掘立柱建物跡が４棟発見された。それぞれの規模は把握できないが柱根が残存しており、遺存状態の良さがわかる。これらの建物跡は大規模な洪水により倒壊したものとみられ、その後徐々に第一面が堆積したものと考えられる。この他調査区中央部では木枠をもつ方形の井戸跡が１基発見されている。洪水により上部が削られており、第二面の調査の段階で下部がわずかに確認できたものである。

遺物は木製品が圧倒的に多く、下駄・漆塗りの椀・曲げ物のような日常の生活用具から、斎串・人形・呪符といった祭祀に使われたもの、さらには建物の部材までと幅広い。中でも網代垣は特筆すべきものである。ほぼ完全に近い状態で出土した例は、全国的にみても貴重なものである。一方では刀子・鎌などの鉄製品、銅銭、青磁・白磁といった中国製磁器、砥石・硯のような石製品、僅かではあるが骨角製品の笄もある。さらに獣骨、桃の種・籾も発見されている。しかしかわらけ・鍋といった土器については、遺物全体からみれば点数は少ない。

調査風景

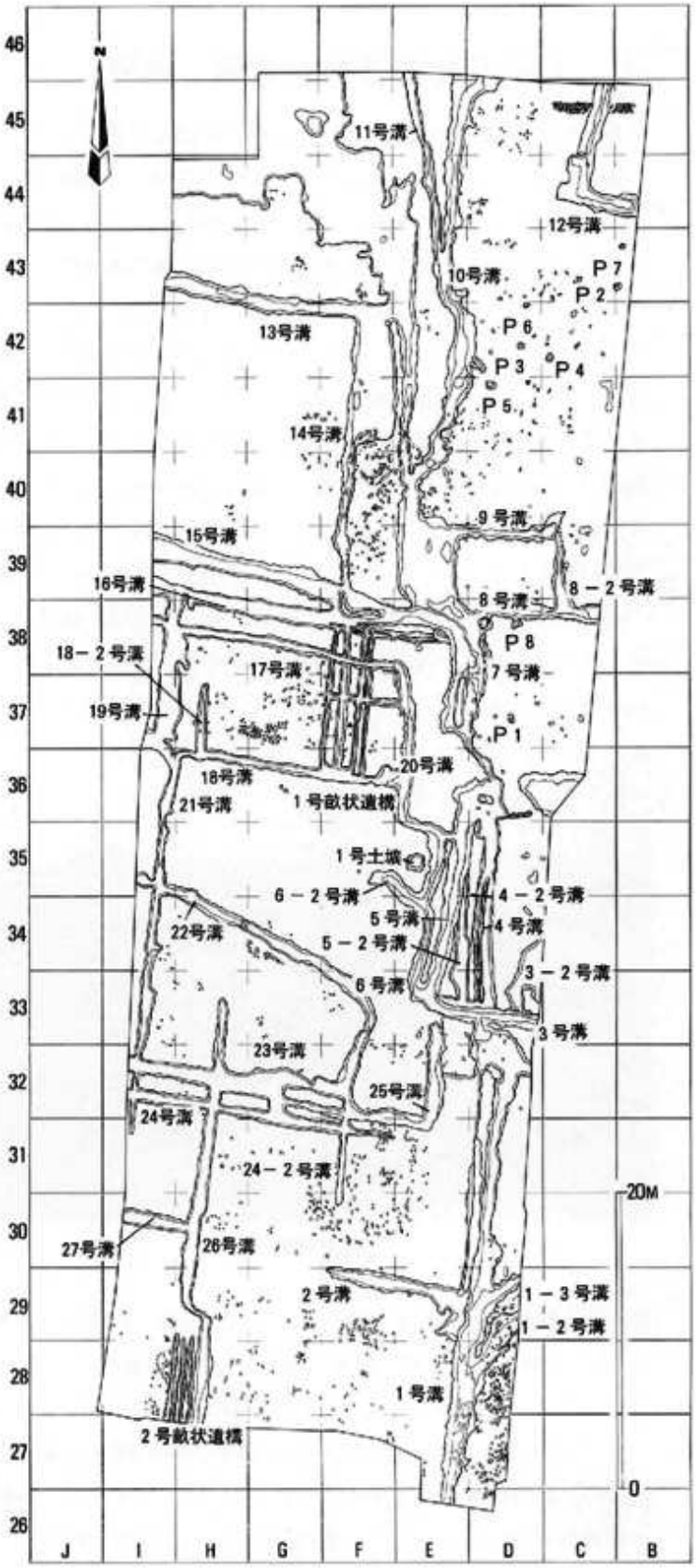
これらの遺構・遺物から、第一面は該期における「水辺の祭祀遺構」であり、溝で区画された遺構には、祭祀においてのそれぞれの「役割」のようなものが存在したのかもしれない。そして掘立柱建物跡も祭祀に関連する施設であったことを窺わせる。それは絵巻物に描かれているような、当時の民衆の生活や「まつり」や「まじない」の風景を彷彿させるものである。

弥生時代後期の第二面は、第一面に比べ堆積が薄く不安定で、氾濫を受け残りは悪い。ほぼ全面に足跡状の窪みが多数検出され、またⅠ区でみられた地割れ・噴砂もあるが、それ以外には遺構は確認できなかった。遺物については、建物の柱材とみられる木製品、土器片、自然の流木が発見されたが、僅かなものであった。

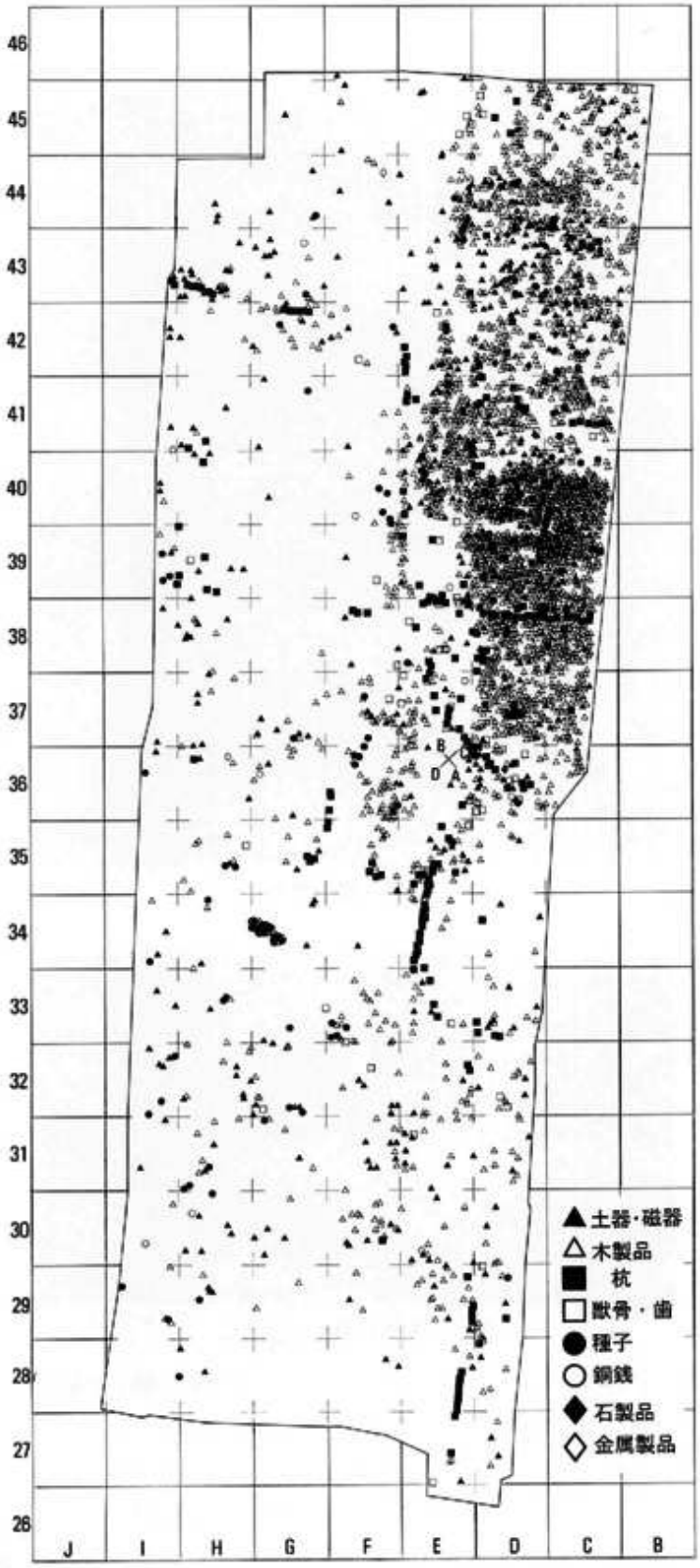
〔溝と祭祀〕　調査区全体を走る溝は不規則で、一見縦横無尽といった感じさえする。しかしよくみると、それぞれが大小様々な不整形の区画を造っていることに気が付く（右図）。それは整然とはいえないまでも、何らかの目的を持って流れていたものと思われる。しかも溝および溝によって造られたそれぞれの区画の周辺からは、生活用具と共に、祭祀に関連した遺物が多数発見されている。それぞれの区画が、祭祀での「役割」を担っていたとみられる。そして溝はその境界線として機能し、同時に「聖なる空間」を造りあげていたと考えられる。区画された遺構（13P 写真9）の中には、斎串が5本～6本まとまって刺さっていたところもある。また後述するように、桃の種がまとまって出土しており、溝の中でも祭祀を行ったようである。

この他ピットは建物の柱穴の可能性もあるが、規則的ではない。ピット1で銅銭を埋納したように、畝状遺構も含め、何らかの祭祀行為の跡ではないだろうか。

すべてを祭祀に関連づけるのは危険であるが、これらの溝は、大規模な祭祀を演出していたということができよう。



Ⅱ区　第一面　全体図（1／500）



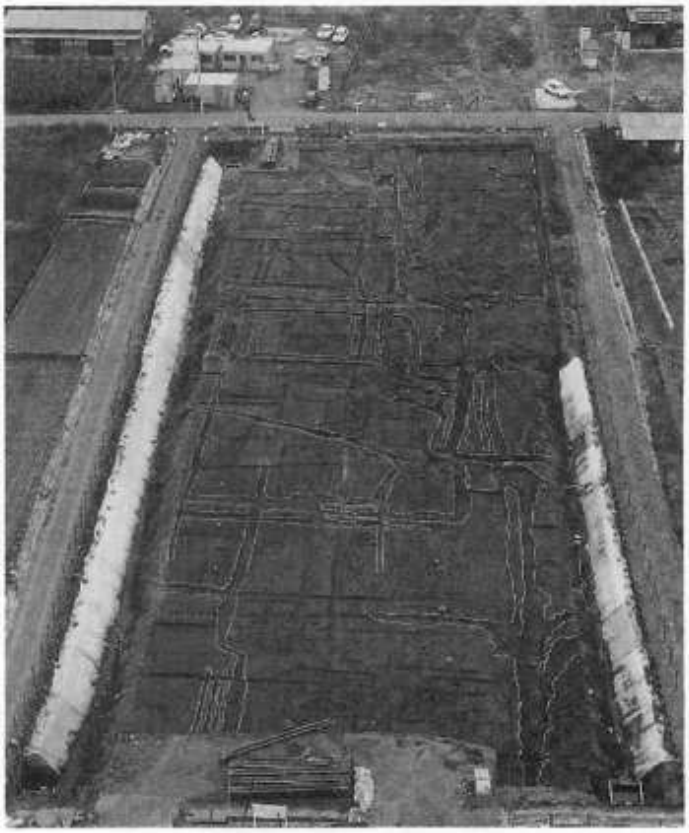
Ⅱ区　第一面　出土遺物分布図（1／500）

〔遺物〕　木製品の多さについては先に述べたところであるが、微高地部分からの出土が大半を占め、その数は8000点を越える（左図）。

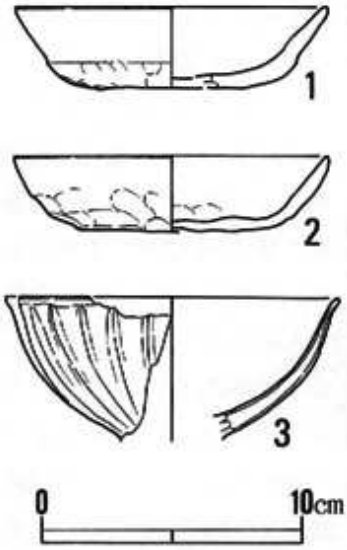
生活用具である下駄は、すべて連歯のもので、末広がりの歯の高いものから子供用のものまである。草履状木製品には、藁の部分が残っているものがある。漆製品の中にはカボチャとスイカを描いたユニークな椀もある（13P　写真6）。曲げ物については大・小様々な大きさがあり、まな板として転用したとみられるものもある。

第一面を象徴するものは、なんといっても斎串・呪符・人形・陽物などの祭祀用具であろう。斎串は点数が最も多く、幾つかの形態に分類できそうである。唯一の文字資料である呪符（13P　写真7）は、陰陽道の五芒星を記したものであるが、疫病除けの「蘇民将来札」かどうか現段階では判断はできない。しかし呪術的な性格をもつこの遺物は、「まつり」・「まじない」が生活の中に深く浸透していたことを物語る貴重な発見といえる。手鏡形をした木製品（13P　写真8）は祭祀に使われたかどうかはわからないが、興味深いものである。北

宋銭を中心とした銅銭は116枚を数える。そのうち28枚はピットに一括して埋納されたとみられるもので、他は包含層中に散在して出土した。その中には貨泉・後漢五銖・四銖半両もある。獣骨は馬が多く、「まつり」の際に「生け贄」として捧げられたものであろうか。さらに桃の種や籾の集中地点（写真10）も発見されている。これらからは、様々な祭祀の形態を垣間見ることができ、特に7～9号溝一帯の夥しい量の木製品は、「まつり」、「まじない」が頻繁に行われていたことを示している。



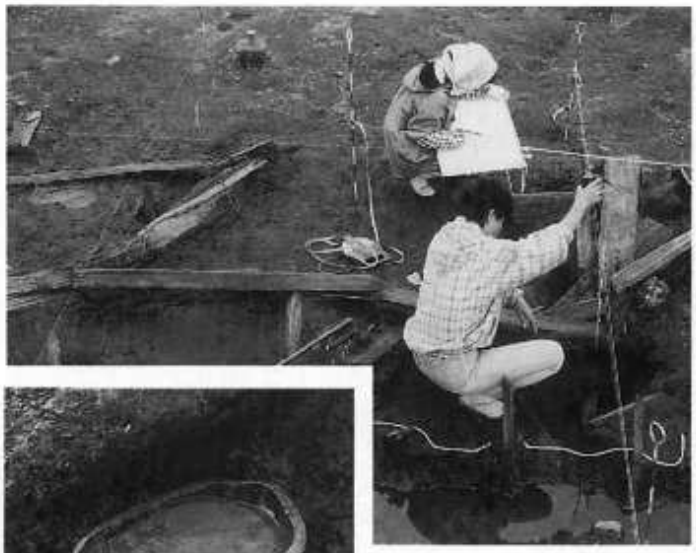
1．第一面　全景



かわらけ・青磁碗実測図
（1／3）

2．12号溝木製品出土状況

この他、刀子・鎌・鎌・蓋などの鉄製品、砥石や硯（写真5）、笄（骨角製品）・櫛・扇などの化粧具など、遺物は多岐に亘る。第一面の時期決定の拠り所としたかわらけについては、手捏ね成形のもの（図1・2）から、13世紀中葉～後半の年代観が与えられる。輸入磁器類は、龍泉窯系の青磁蓮弁文碗（図3）を中心に白磁なども破片ではあるが多数出土しており、これらについても同様の範疇でとらえられる。また甕・鉢類については、在地のものに混じって、常滑窯系の甕、山茶碗窯系のこね鉢もある。



3．実測風景

4．人形

5．硯

6．漆椀

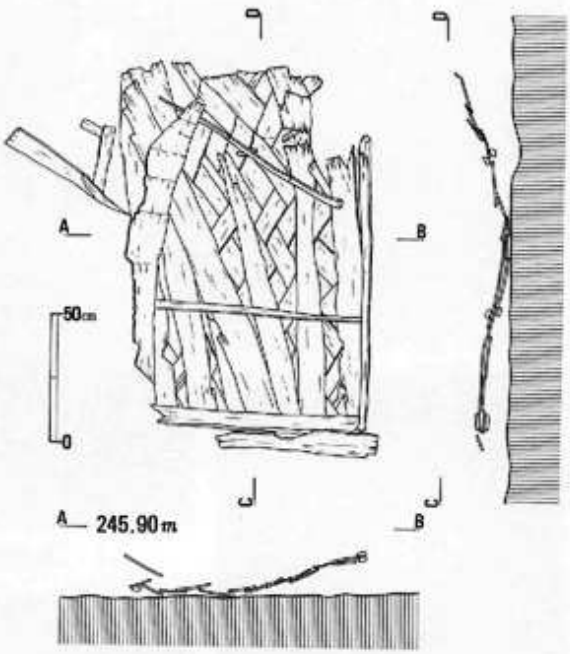
7．呪符

8．手鏡形木製品

9．溝で区画された遺構

10．桃の種集中地点（22号溝）

〔網代垣〕　組垣の一種である網代編の檜垣と思われ、絵巻物ではしばしばみられていたものである。縦149cm×横93cmで、幅7cm、厚さ0.3cmの薄板を編み込み、片面に薄板を縦に貼った後、両面から横桟と枠板で挟み込んである（図および写真２）。周辺には檜垣を巡らした建物が存在したとみられ、氾濫による土砂で押し潰された状態で出土し、枠板の一部は流されてしまっている。とはいえ、ここまで遺存状態の良い出土例は他にはなかったものであり、精巧に作られたその美しさは、当時の技術の高さに裏付けられたものである。「掘り起こされた絵巻物」は建築史からみても重要な資料を提供したことになろう。

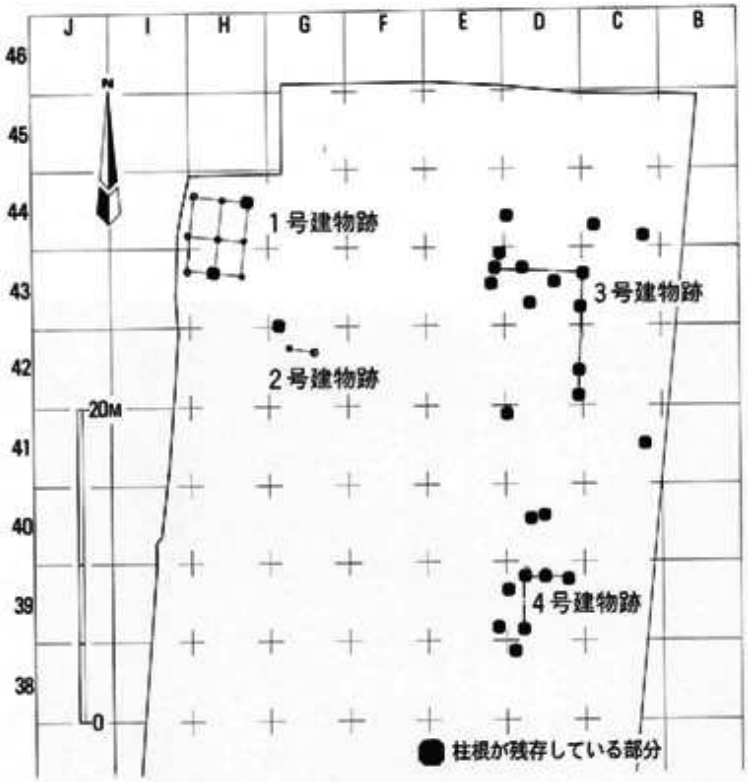


網代垣出土状況（1／30）

1．網代垣検出風景

2．網代垣部分

〔掘立柱建物跡〕　様々な遺物が出土した第一面を掘り下げていくと、掘立柱建物跡（以下建物跡）が現れた。柱根は多数検出されたが、建物と認定できたものは４棟分である（15P　図および写真）。１号建物跡は東西２間以上（柱間約1.9m）、南北２間（柱間約2.2m）の総柱建物である（写真２）。２号建物跡については、建物跡かどうかの判断は困難であるが、東西の柱穴（柱間約1.8m）と、その西側にある柱根が接しているため建物跡とした。３号建物跡は東西３間以上（柱間約1.9m）、南北４間以上（柱間約２m）である（写真３）。４号建物跡は東西―南北共に２間以上（柱間約1.8m）で、西側にある柱根は、建物に付属する庇のような施設かもしれない（写真４）。１号・２号建物跡は柱穴の掘り込みは洪水で削られ浅く、３号・４号建物跡については包含層中の大量の遺物に阻まれ、柱穴の掘り込みは確認できなかった。残存していた柱根は12cm（４寸）角で、角を面取りしてある（写真１）。いずれも斜め

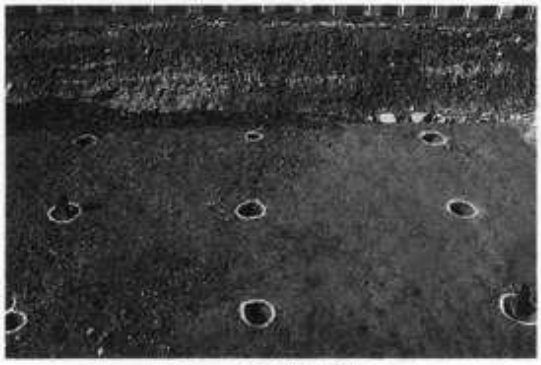


掘立柱建物跡位置図（1／500）

に傾いており、洪水でなぎ倒された様子がわかる。樹種については現在鑑定中である。

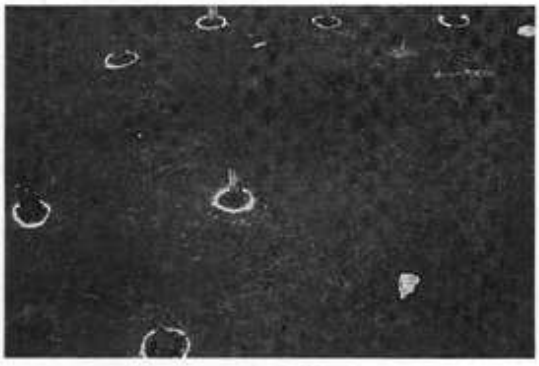
井戸跡は東西―南北共に95㎝の方形で、枠板は最下段の横板（幅10㎝・厚さ0.2㎝）と、一辺の中央部とコーナー部分に支柱のみが残っていた（写真５および16Ｐ写真）。

1．柱根



2．１号建物跡

3．３号建物跡



4．４号建物跡

5．１号井戸

〔第二面〕　Ⅱ区の調査区北側約３分の１の面積は、洪水を受け残っていなかった。無数の窪みは水田での耕作時における足跡のようにみえる（写真）。かつてはⅠ区でみられたような水田が造られていた可能性もある。遺物は、建物の柱材とみられる木製品（長さ195cm・径18cm）の他は流木で、壺・台付甕などの土器片も磨滅していた。またこの面を覆っていた砂礫層中からほぼ完形の壺が発見されたが、やはり流されてきたものであった。第二面は洪水の爪痕のみが残った形で発見されたことになる。

11. 第二面全景（中央右側が１号井戸）

5．まとめ

今回の調査では、弥生時代・鎌倉時代の文化層が確認され、様々な成果を得ることができた。特に鎌倉時代の第一面については、これまで大まかにしかとらえられていなかった祭祀の実態が、大量の木製品と共にかなり具体的な形となって現れたことは、極めて重要な意義をもつものと思われる。県内では該期の遺跡の調査例がほとんどなかったこともあり、本県の中世研究はさらに発展していくものと思われる。これらを通して、今後は当時の人々の精神面へのアプローチが必要となろう。

一方弥生時代の第二面の地震跡、第三面の火山灰は、該期の時期決定あるいは古環境を復元する上で、今後新たな問題を提起することになろう。

しかし各面におけるⅠ区とⅡ区との整合性―特に第一面における生産域（Ⅰ区）と居住域・祭祀遺構（Ⅱ区）との有機的関係―など、検討すべき点が多く残されている。引き続き行われるⅢ区・Ⅳ区の調査を踏まえ、考察していきたい。

調査組織

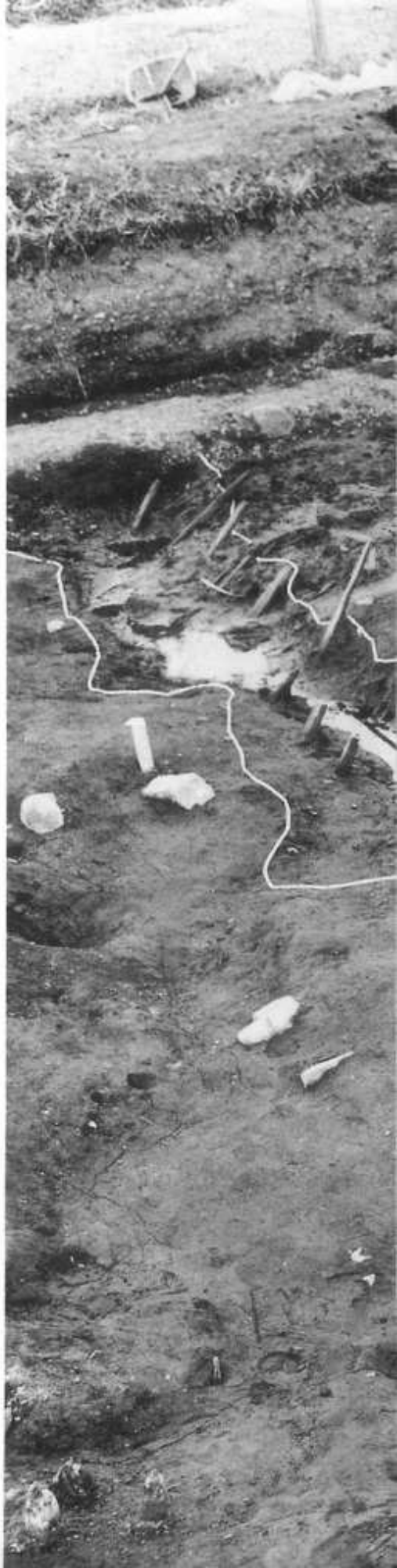
調査主体　山梨県教育委員会
調査機関　山梨県埋蔵文化財センター
調査担当者　Ⅰ区　新津　健（山梨県埋蔵文化財センター主査・文化財主事）
田口明子（山梨県埋蔵文化財センター文化財主事）
Ⅱ区　小林健二（山梨県埋蔵文化財センター文化財主事）
小泉　敬（山梨県埋蔵文化財センター文化財主事）
作業員・整理員　Ⅰ区　秋山進也、秋山とみ、秋山正文、麻生菊江、石川修二、井上時江、今津勝、内田武子、大木つや子、大堀あき子、乙黒さつき、小野ゆき子、折居きく、金丸初子、黒田美江子、斉藤利男、斉藤直江、斉藤良一、佐久間竹雄、佐藤勝子、佐野とみ江、鮫田真理、志村京子、鈴木福子、瀧澤かねじ、丹沢政一、鵜田久子、新津光明、野沢昭子、樋口市蔵、樋口京子、樋口とよ子、樋口瑠璃子、深沢繁、宮本一子、望月和子、山崎正行、横内定平、依田友弘、渡辺あけみ、渡辺浩司、渡辺千恵子、渡辺俊夫、花輪延次
Ⅱ区　厚芝照子、石原和幸、石原京子、伊東としの、井上和美、井上ことじ、井上とめ子、井上巴江、井上はるみ、井上ひさ江、井上増美、井上八重子、入倉すみ江、入倉美和、上田盈、宇野富貴子、宇津宮則子、大木愛恵、大木秀子、大森喜美子、大森武雄、小川重子、加賀美勝子、川住照子、河住初美、河村奈苗、功刀四郎、河野静夫、桜田光江、佐藤澄子、佐野ハマ子、清水好子、志村磯江、志村教子、鈴木うた子、千野里美、土屋辰江、土井みさほ、新津多恵、西川真人、野沢友彦、樋口きくゑ、樋口久子、広瀬悦子、深沢秀子、細川初三、細川治子、山崎清子、依田晶一
協力者・機関　井上栄一、小川和茂、甲西町教育委員会、甲西町役場

報告書概要

フリガナ		ダイシヒガシタンボイセキ		
書名		大師東丹保遺跡		
副題		一般国道52号（甲西道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報		
シリーズ		山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第86集		
著者名		新津　健・田口明子・小林健二・小泉　敬		
発行者		山梨県教育委員会　建設省甲府工事事務所		
編集機関		山梨県埋蔵文化財センター		
住所・電話		〒400-15　山梨県東八代郡中道町下曽根923　TEL　0552-66-3881		
印刷所		合資会社　ヨネヤ印刷		
印刷日・発行日		1994（平成6）年3月22日・3月30日		
大師東丹保遺跡（だいしひがしたんぼ）		所在地	山梨県中巨摩郡甲西町大師字東丹保175 他	
		25000分の1　地名・位置・標高	小笠原	北緯　35°35′09″　東経　138°29′41″　標高　250m
概要	主な時代	弥生時代中・後期、鎌倉時代		
	主な遺構	弥生時代中期の溝、後期の水田跡・水路、鎌倉時代の掘立柱建物跡・水田跡・溝・水路・井戸・杭列・土壙		
	主な遺物	弥生時代中・後期の土器・木製品・動植物遺存体、鎌倉時代の土器・中国製陶器・木製品・鉄製品・石製品・骨角製品・銅銭・動植物遺存体		
	特殊遺構	弥生時代後期の地震跡、鎌倉時代の祭祀遺構		
	特殊遺物	弥生時代中期の火山灰、鎌倉時代の呪符・網代垣		
	調査期間	平成5年4月12日～12月27日		

山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第86集

1994年３月22日　印刷
1994年３月30日　発行

大師東丹保遺跡

編集　山梨県埋蔵文化財センター
山梨県東八代郡中道町下曽根923
ＴＥＬ　0552-66-3881
発行　山梨県教育委員会
建設省甲府工事事務所
印刷　合資会社　ヨネヤ印刷